

令和 4 年度 第 1 回豊田市市民活動促進委員会記録

日 時	令和 5 年 2 月 2 日（木） 午後 6 時 30 分～午後 8 時 2 0 分
場 所	とよた市民活動センター・オンライン（Zoom）
出席者	<ul style="list-style-type: none"> ● 委員（敬称略、会長・副会長以外 50 音順） 谷口功（会長）、伊東浄江（副会長）、有我都、大地裕介、鬼木利瑛、田中茂樹、西村新、長谷川和哉、三島知斗世、三田博司、三ツ石靖子 以上 11 名 ● 事務局 生涯活躍部 ： 南部長 市民活躍支援課 ： 小澤課長、和出副課長、堀田担当長、川瀬主査 とよた市民活動センター： 近藤所長、加藤担当長、勝川主事
傍聴者	なし
欠席者	小野健委員、宮田奈佑委員

1 開会

- (1) 開会のあいさつ（近藤所長）
- (2) 部長あいさつ（南部長）

2 議事

- (1) 第 3 期豊田市市民活動促進計画進捗状況（令和 3 年度）について
事務局から第 3 期豊田市市民活動促進計画進捗状況について資料 1-1、1-2 に基づいて説明しました。
- (2) 第 4 期豊田市市民活動促進計画の具体的取組について
事務局から第 4 期豊田市市民活動促進計画の具体的取組について資料 2 に基づいて説明し、内容についてご意見いただきました。

A 委員	「ニューノーマル」について、中部圏地域創造ファンドのアンケート調査では約 67%の団体が「オンラインで何らかの活動している」という結果だった。リアルに戻りながらも、オンラインによって活動が広がる、繰り返しできる良さがあり、ハイブリットも考えていく事が重要。市民活動センターとしては、オンラインを市民活動の発展にどう伝えるのか意識しながら、事業を進めて欲しい。
事務局	第 4 期計画策定前に市民活動団体に対して、令和元年と令和 2 年にアンケートをとったが、その後の状況を把握できていない。2 年経過し状況が変わっているので、アンケートを取り直し、今後の施策につなげていきたい。
B 委員	Zoom で田舎と街中でミーティングが出来る。色々な方たちとのコラボレーションの可能性が広がる。

C 委員	学生はオンラインで打ち合わせや話し合いをしている。小学生や中学生もタブレットを使っている。対面も大事だと思うので、うまく使い分けることが必要。
D 委員	高齢者も意外とスマホやオンラインを使う人は増えている。一方で使えない人も一部いるので、サポートも検討をする必要がある。
E 委員	オンラインは、市民活動を広げていくためのツールになって行くという事を念頭において、次年度以降提案いただきたい。
A 委員	「テーマ型団体と地縁組織の交流会」について、色々と難しさがあると思う。伴走支援をして、仲介やお手伝いをするとか、研修だとか、知恵の交換ということも、次のステップとしていくといい。
E 委員	交流館との研修をする際に、地縁組織と交流活動、そしてこの市民活動センターと色々なテーマ型の活動団体がどう連携できるのかといったようなことまで踏み込んだ研修になるといい。
F 委員	研修では、職員が互いの支援組織を知る事に留まった。その中で市民活動の毛色の違いを感じた。今後、組織連携によってどのような活動促進にすべきか探りたい。
G 委員	豊田市には 28 か所の交流館という拠点施設があり、地域の事は地域でという流れがある。拠点施設に相談窓口を作り、対応していくことが大事。市民活動の支援できる窓口が出来れば、他の部署も追随する。
H 委員	●●に行くといいだけでなく、●●の○○さんに行けばちゃんと話を聞いてもらえるみたいに、それぐらいの紹介ができるぐらいにお互いを知っていると、責任を持って紹介できる。
A 委員	SDGs カードを作成した講座・交流会から、共同事業提案制度の相談につながった事例はあるのか。
事務局	共働事業提案制度の相談につながったケースは無い。
E 委員	SDG s という共通言語ができたので、勉強したい時に支援したり連携していく仕組みは何か考えているのか。
事務局	令和 4 年度は SDGs カードを作成した。カード作成で終了ではなく、令和 5 年度はファシリテーター養成という形で広げていく。
I 委員	社内でも SDGs はキーワードになっているが、社員個人に落とし込むまでには至っていない。関心を持つてる社員に対していかに一歩踏み出させるか、社協など色々な団体との連携を模索している。
J 委員	つながりという意味では、当初、日本語教室内の整理整頓を目的に来ていただいた方が、外国人若者の実態を十分理解しており、その後も団体のサポートをしていただいている事例がある。
K 委員	山村地域は過疎化が相変わらず進んでおり、地域のかの力のある地域と無い地域と差があるし、無い地域が増えている。いかに地域住民にその気になってもらうのが最大の難点。こうしようと提案して始

	めると、やらされた感が満載になってしまう。あえて地域住民がその気になるまで待つスタンスでいる。
B 委員	市民活動センターに相談に来るのは団体だけでなく個人もいると思うが、相談の内容はどうなのか。
事務局	個人がこういうをことやりたいとなると、結局団体立ち上げという話につながる。初歩的な相談はセンターで答えるが、一社や NPO を立ち上げたい等の専門的な内容の場合、NPO 運営相談員（行政書士ほか）につなげる。1 時間無料（センターが謝礼負担）で対応している。
B 委員	NPO とか一社にしたいという相談は、やはり団体前提。チームを作るところから、苦労してる人が多いため、チーム作りの支援をしてもらえると良い。
D 委員	ボランティアセンターは、ボランティアをしたい、グループに入りたいという個人の相談が多い。団体立ち上げの相談の場合、知り合い等に声をかけて 2・3 人仲間作りをした上で、具体的にどういった手順で団体を作るかを整理させてもらっている。
F 委員	交流館も度相談件数が増え、個人や地域活動団体に寄り添い活動支援をしている。公共施設予約システムが導入されてから、地域以外の人利用も増え、内容も多様化している。
I 委員	イベントやボランティアに参加する社員に、なるべく声をかけて話をするようにしている。また、アンケート結果を利用して、情報が欲しいと回答した人にピンポイントで情報を送ったら、市民活動団体と結びついたという成功事例もある。
D 委員	市民活動センターが、国際交流やボランティアセンターの範囲まで踏み込む必要はなく、中間支援組織がいかに連携して、この機能で何ができるのかってところにつなぎができればと思う。 令和 4 年度の実績は分かったが、成果や課題など指標があると分かりやすい。令和 4 年度にやったものが新たにやったものなのか、継続的にやったものなのか、継続的にやったらどこをどう変えたのかってというのがないと議論しやすい

(3) 令和 5 年度以降の新たな取組予定

事務局から令和 5 年度以降の新たな取組予定について資料 3 に基づいて説明し、内容についてご意見いただきました。

D 委員	共同事業提案制度が減っている事は分かった。S I B が新たに始まり増えていると思うが、この辺りの整理はどうなのか。
事務局	共働事業提案制度は、企業や小さな団体で志を持っている方たちと、行政がどう連携していくかを目的に立ち上げられている。一方で SIB は、事業者とインパクトを出しながら、成果を出していくと

	いうスタイル。すぐに事業者のインパクトというよりは、小さな活動を応援していく事が大事なので、その辺りも踏まえ、市民活動促進補助金と共働事業提案制度の見直しを図りたいと考えている。
G 委員	NPO 相談員をやっているが、法人化の相談の場合、相談時間が 1 時間では無理で 2 ～ 3 時間は必要。
B 委員	共働事業提案制度で 11 件の相談中 1 件も採択されなかったのは、ハードルがあるのか。
事務局	共働事業提案制度は、行政と一緒に何か事業やりたいという提案をいただき市が予算付けをするがそこまで行かないパターンがほとんどである。行政の各部署が予算付けをしたいと思わせる事業に練るハードルが高く予算も翌年度になる。制度そのものをどう活かすのか、あるいは見直すのか含めて、制度のあり方を考えたい。

(4) その他

共働・市民活動についてご意見いただきました。

C 委員	共働事業提案制度で団体を立ち上げて 11 年目になる。事業を行うにあたり色々と相談に乗ってもらった。市の担当が代わると、共働がそもそも何だったのかブレてしまう。税金を使っているのに、土台となる部分を議論してスタートして欲しい。
F 委員	支援組織側の市民活動の考え方に違いはあるが、テーマ型団体と地縁組織をつなぐ事や支援組織でつながりを強めることで、新たな活動支援のあり方を探りたい。
D 委員	連携や共働は、同じことをやる必要は無く、違う部分はどこなのか整理が必要と感じる。市民活動センターが扱う市民活動の領域が一番広いと思う。
I 委員	ボランティアがやっていること、やれることをしっかりやっていく。色々な課題を情報提供していくことに注力していきたい。
B 委員	市民活動がどうあるべきか、市民活動が多様化する、市民が主体的に行動することなので、誰かがどうあるべきかという事に違和感を感じた。コーディネートとか、何かやりたい人たちの支援をしていくことで、見えてくるものがある。
H 委員	多様化してるからこそコーディネートにつながる。市民活動センターが何をしてるのか、何ができるのか分かりやすく明確に伝えることが必要。
G 委員	部活動の地域移行が話題になっている。地域の中心は交流館であり、そこから発信していくのが正しいと思う。コントロールしていく役割が交流館に求められている。
K 委員	共働と言われて以来、市民活動が多様化している。多様化して皆が楽しいものだなと感じてもらえるようにするのが大事である。

A 委員	一つの課題に対して、色々な切り口から考えることが必要。市民活動団体がいろんな顔を持つ事に気づくと、活力につながったり、色々な団体とのコラボも生まれるかもしれない。発想を広げて、色々議論できたら、楽しく考えられるのでは。
J 委員	市民活動センターが、何か思いを持って動こうとしている人たちを伴走支援していてもらいたい。
E 委員	大学は「共創」がキーワードとなっており、企業と一緒に話をしている。

閉会

(1) 議事録確認のお願いをしました。